〈修士論文要旨〉

修験道研究における考古学的展開について

大　髙　義　寛*

従来の修験道の研究は各地に伝わる関係史料や「切り紙」などを対象とした史料学的研究か、あるいは民間伝承や儀礼を対象とした民俗学的な研究が中核をなしていた。しかし、山岳信仰の研究が進展するにつれ、各地の山岳遺跡で調査が行われるようになり、これに伴って修験道に関する考古学的情報も蓄積されるようになった。そして近年、時枝務氏により修験道考古学が「山の考古学」の一分野として提唱されるに至る（時枝2005）。そのような各地の先学諸氏による修験道の考古学的調査・研究はそれまでの史料学・民族学的調査の裏付けを得ると共に、即物的な側面から修験道の実態解明に多大なる功績を残してきたが、地方性に富むという修験道の性質に影響されてか、個々の山岳内における研究に留まることが多かった。もちろん、個々の山岳内における修験道の実態を解明し、地方修験の性格を明らかにすることは、修験道全体の実態解明に必要不可欠な研究となることは間違いない。ただ、より発展的に修験道の実態究明を行うためには山岳間や関係地域間での比較研究も必要である。これまでにも大和久震平氏の研究のように山岳間の比較を用いた研究は存在した（大和久1990）。大和久氏の研究は古代の山岳信仰を対象としたものであるが、各地の山々を踏査し、遺物や遺構、地形からその山岳の性質を捉え比較する研究方法は山岳信仰の一角でもある修験道の研究にとっても有意義なものとなっている。しかし、このような画期的な研究においても、対象を山頂に限ったり、いずれかの山岳に基準を置いたり（大和久氏の場合は日光山地）して研究がなされている。

そこで本研究分野で次に踏破すべき課題は、いずれの山岳にも準拠することなく様々な山岳間、或いはより多くの対象を結びつけて比較研究を行えるようにするための基準モデルを設定することにあると思われる。それがより発展的な研究の一手段となり、修験道の宗教観を物質面から解明する糸口となるとともに、日本宗教史上から欠落してしまった部分を補完するという、宗教考古学の一大命題にも寄与することができるものと信ずる。

本研究では、比較研究のための基準モデルを仮定し、実際にそれが修験道研究において有効な手段となりうるのかどうかの検証を以下の手順で行った。

① 関連遺跡をその規模によって山系レベル、地区レベル、地点レベルの三段階に分類した。

② 各段階において必要と思われる項目を立地条件の観点を加味し仮定した。

③ 求菩提山の修験道関連遺跡の情報を用い、どのようなデータが採取できるかを分析した。

④ 大峰山と白山の修験道関連遺跡のデータから、両山岳における立地的側面からの比較を行った。

⑤ ③、④の結果から、基準モデルを用いることの有効性と発展性を検討・考察した。

平成19年度　*文学研究科文化財史料学専攻

本研究で得られた成果は以下の三点である。

① 修験道関連遺跡を分析するための分類法及び整理法の一基準モデルを仮定した。

② ①の基準モデルを用い、範囲や規模の異なる遺跡情報を一定の枠組み内で整理することに成功した。

③ 限定的な条件下ではあるが、大峰山と白山の立地面に立脚した比較データを得ることに成功した。

得られた成果から求まる最終結論としては、修験道の研究において基準モデルを用いて遺跡の比較研究を行うことの可能性を示すことができた。確かに、未だ設定条件や設定項目には議論の余地が残り、収集する情報や対象についても更なる充実を求めなければならないことは明らかである。しかし、すでに全国各地で詳細な調査が行われ、その情報の蓄積量もけして少なくはなく、また現在進行形で調査が進んでいる地域もある。それらの情報の活用と、今後さらに汎用性の高い基準モデルを確立させることができれば、修験道研究の有力な一手段となり得ると言えるのではないだろうか。